

東京大学グローバルリーダー育成プログラム  
トライリンガル・プログラム

「多言語・複言語教育における東京大学の飛躍」

**未来のグローバルリーダーと  
学びの共同体**

2019.02.01  
東京大学駒場キャンパス

古石篤子  
akak@sfc.keio.ac.jp

**話の流れ**

1. はじめに: 東大でTLP!
2. 日本の外国語教育政策と「異端」
3. 「トライリンガル」ということ
4. 真の「グローバル・リーダー」に!
5. おわりに: 期待するTLPの今後

2

**1. はじめに**

- 東大でTLP (Trilingual Program) !

**2. 日本の外国語教育政策と「異端」**

1990 慶應義塾大学 SFCの立ち上げ

自然言語 / 人工言語教育の革新  
↓  
新しい外国語教育: 理念・制度・方法

SFCの外国語教育の理念

Ver.1 多言語主義・アジア語重視・発信型  
Ver.2 自由化・高度化・多様化

**当時の高等教育(大学)での外国語教育は?**

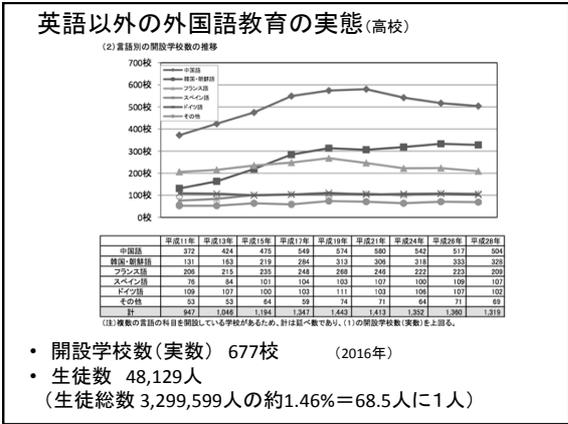
- 大学設置基準(昭和31年、1956)
- 大学設置基準の大綱化(平成3年、1991)
  - 自由化 → 結果として多くの大学で第二外国語の廃止
  - 自己点検・評価とその結果に対する外部検証

**「提言」**

「多言語教育推進研究会」(日本言語政策学会SIG)が2014年2月23日付で文部科学省などへ提出した提言書

- 高等学校において、英語に加えて「第2の外国語」を選択必修科目と位置づけ、すべての高校生が7言語(アラビア語、韓国・朝鮮語、スペイン語、中国語、ドイツ語、フランス語、ロシア語 [五十音順])のうちから1つの外国語を選択必修するようにする。
- 7言語の学習指導要領案を添付
- 【言語種について】
  - とりあえず、国連公用語+ドイツ語、韓国・朝鮮語

<http://web.sfc.keio.ac.jp/~akak/download/Teigen.zip>



### 中等教育

- 1998年制定(2002年実施)の中学校「学習指導要領」  
- 「外国語を必修とする。中学校では英語を履修させることを原則とする。」  
⇒ ドイツ語、フランス語の学習指導要領消滅
- 高校の学習指導要領でも英語以外の外国語については「英語に準ずる」とあるばかり。

### 初等教育でも英語への一極集中

- 初等教育
  - 学習指導要領改訂(2020年度全面実施、2018年度より移行期間)
  - 新設教科「外国語」(英語): 5、6年生で週2回(教材 We can !)
  - 「外国語活動」: 現行5、6年生で週1回 → 3、4年生で週1回(教材 Let's try !)
  - 目標: 「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」

### 一方... ★国内における外国人数の急増

- 外国人登録者数 (法務省入国管理局HP)  
- 218万6,121人(平成21年 2009 末)(前年比1.4%減)  
総人口の1.71% (10年前に比して40.5%増加=約1.4倍!)
- 2010末 2,134,151人
- 2011.3月末 2,092,944人
- 2011.6月末 2,093,938人
- 2011.9月末 2,088,872人(2010末比 45,279人=2.1%減少)
- 2011末 2,078,508人(2010末比 55,643人=2.6%減少)  
総人口の1.63%
- 2012末 2,033,656人(2012年7月出入国管理法変更=単純に前年と比較不能)
- 2015末 2,232,189人(前年末比 110,358人=5.2%増)(総人口: 億2696万人の1.76%)
- 2017.6月末 2,471,458人
- 2018.6月末 2,637,251人 過去最高!  
(前年末比 75,403人=2.9%増)(同年8月 総人口: 億2649.6万人の2.08%)

### 3. 「トライリンガル」ということ

<3という数字の持つ意味>

- 「文化の三角測量」→「言語の三角測量」  
(「東」「西」+「南」) (川田順造 1997)
- EU「母語+2言語」  
複数外国語学習の意味するところ

↓

- 「単に言語能力の量的増加を意味するのではなく、外国語やその文化へ接する際の複眼性など質的变化を伴い得る」(独 ノルト・ウエストファーレン州教育省)
- 「ある一つの外国語と文化の知識だけでは『母』語や『自』文化とに関わる民族中心主義を必ずしも超越できるわけではなく、むしろ反対の影響を受ける場合がある(言語を一つだけ学習し、一つの外国文化だけと接触すると、ステレオタイプや先入観が弱まるどころか強化されてしまうことは珍しくない)。複数の言語を知れば、民族中心主義を克服しやすくなり、同時に学習能力も豊かになる。」(『ヨーロッパ言語共通参照枠』6.1.3.3.)



**「グローバル人材」と文部科学省**

英語への一極集中  
.....

- 1998 中学校学習指導要領：英語原則（仏独学習指導要領消滅）
- 2002, 2003 『『英語が使える日本人』育成のための戦略構想／行動計画』
- 2008 小学校学習指導要領：外国語活動（英語原則）  
.....
- 2011 「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」
- 2013年12月 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
- 2014 「英語教育の在り方に関する有識者会議」

「グローバル人材」= 英語ができる人間 ・ スキル偏重

**「グローバル・コミュニケーション能力」**

- 言語・風習・価値観等が異なる人々と、協調して楽しく、創造的に課題を解決することのできる総合的な能力と異文化に開けた態度 （古石、2014, p.62）
- 3言語×3視座によるグローバル・コンピテンシー  
（上智大学・外国語学部）

日本語 + 英語 + 専攻語

**3言語**

×

**3視座（複眼的思考）**

<p><b>日本</b></p> <p>を再認識・ 発信する</p>	<p><b>世界</b></p> <p>を理解し 問題を解く</p>	<p><b>地域</b> (非英語圏)</p> <p>の多様性を 理解する</p>
--	--	---

↓

地球的視野で考え行動する人へ

<p>【異文化の理解・自分の文化の理解】</p> <p>【他者との協働】</p>	<p>【変化に対応・変化を創造】</p>
--	----------------------

未来のグローバル・リーダー  
TLP修了者に贈りたい3人の言葉

- 世界に出よう！**  
- 「小さな国だけにいるのでなく、どこへでも、世界の困っているところに行く。うろろしているだけでいい。」  
(元国連難民高等弁務官 緒方貞子)
- 「母語」からの脱出**  
- 「自分が幼時から馴れ親しんでいると思っている言語を、それ以外の言語をおぼえ、使うことによって異化し、ことばによる自己表現にダイナミックな創造力を(...)吹き込む」  
(文化人類学者 川田順造)
- 地球規模での公正**  
- 「自由主義的な世界化が地球規模での不正や不平等、貧困を増加させた」  
(記号論学者・ジャーナリスト イグナシオ・ラモネ)

- 西洋と非西洋のあいだにある非対称関係はこれからもずっと存在し続ける。(…) [今そこに] もう一つ新たな非対称関係が重なるようになったのです。英語の世界と非・英語の世界との間にある非対称関係です。(…)
- 我々はどうしたらいいのでしょうか？ (…) 答えは、いうまでもなく、何もできない、です。(…)
- しかし、バンドラの箱に一つ残されていた「希望」のように、我々に一つ残されたもの「我々が英語で書く小説家と比べて絶対に優るどころであり、我々の唯一の希望です。」  
それは、一度この非対称性を意識してしまえば、我々は、「言葉」にかんして、常に思考するのを強いられる運命にあるということにほかなりません。そして、「言葉」にかんして、常に思考するのを強いられる者のみが、<真実>が一つではないということ、すなわち、この世には英語でもって理解できる<真実>、英語で構築された<真実>のほかにも、<真実>というものがありうること—それを知るのを、常に強いられるのです。もちろん英語を書く作家にも言葉にかんして思考する作家はいるでしょう。でもかれらは、私たちのように常に思考するのを強いられる運命にはない。(下線古石)

水村美苗 (2008:87-88)

**4. おわりに：期待するTLPの今後（私見）**

- 言語種の増加**  
- Ex. アラビア語、スペイン語、マレー・インドネシア語、ヒンディ語、スワヒリ語？
- 英語条件の緩和？**  
- Ex. 北アフリカ研究（フランス語＋アラビア語）
- 「～語で学ぶ」**  
- Ex. コンテンツ科目の増加、海外フィールドワーク奨学金
- 東大モデルの発信を！**

**参考文献**

- 川田順造 (1997) 「ことばの多重化＝活性化—アフリカの体験から」『多言語主義とは何か』(三浦信孝編) 藤原書店.
- 木村護郎・クリストフ (2016) 『節英のすすめ』 萬書房.
- 古石篤子 (2014) 「真の『グローバル人材』育成と外国語教育を考える」『三田評論』6月号, pp.60-63.
- サイド、エドワード (1998) 『ペンと剣』(デービッド・バーサミアン【インタビュー】、中野真紀子訳) クレイン.
- 野林健・納家政嗣 (編) (2015) 『聞き書 緒方貞子回顧録』 岩波書店.
- 水村美苗 (2008) 『日本語が亡びるとき：英語の世紀のなかで』 筑摩書房.
- 森住衛・古石篤子・杉谷真佐子・長谷川由起子 (編著) (2016) 『外国語教育は英語だけでいいのか』 くらしお出版.
- ラモネ、イグナシオ (2004) 『21世紀の戦争—「世界化」の憂鬱な顔』(井上輝夫訳) 以文社.